

槐

かい

岡井省二創刊

平成20年8月号

平成二十年八月一日発行 第十八巻第八号 通巻第二〇六号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



晩夏光

高橋将夫

どれも皆自信に満ちて武者人形
押し上げて押し上げられて雲の峰
さきほどの怒りはどこへ朝の風
まだ吾を入るるに足りぬ片かげり

『俳句研究』（夏の号）より八句

夏はものみなかろやかで塩辛し
蘭鑄の動けば水のやはらかし
見目よくて味のなかりしトマトかな
蟻地獄出てかげろふとなりにけり
客観に主観をかけるかき氷
御来迎人がをらねば神はなし
酒に酔ひ夢には酔へず晩夏光

槐賞受賞作品二十句

近藤公子

芒野や言ひたきことは風に乘せ
神の息かかりて泰山木の花
根を張りしものの風格天高し
オーロラをまとひて踊る初夢に
にんげんに根つこありけり竜の玉
思へども山のむかふや秋刀魚焼く
カンツオーネ銀河鉄道の客となる
白は神の色春は夢の色
身の内に吹き溜りたる落葉かな
色即是空しやぼん玉の行方かな

玄黄のあはひに烏瓜の赤
同じ手で骨壺も白桃も
臍の緒の音からからと初秋かな
どんどの火弾けて星となりにけり
耳たぶの伸びてをるなり更衣
月光やガラスの靴にはきかへて
オカリナの穴より出でし冬の星
餅爆ぜて七福神の出で来たる
頭の中に寒九の水を張りにけり
幾千の祈りのありて蟬生まる

槐賞受賞作品二十句

中田禎子

野ねずみの巢穴を出でし花野かな
大^{おほし}礫^{やこ}の銀河へ続く泡かな
方舟をすべり落ちたる海鼠かな
氷柱もてつららを払ひぬたりける
一ぴきは目の前にをり蟬時雨
星の渦に天^{あま}瓊^{のぬほこ}矛^{ほこ}よ桜鯛
波音と同じ呼吸や秋夕日
寒林の色となりたる樵かな
依代にとどまつてをる黄蝶かな
ゴッホの耳芳一の耳鮑食む

猪垣のむかふ日溜りありにけり
啄木鳥の雲の扉を開きたり
冬銀河漆黒もまた浄土かな
瑠璃色の闇より冬木裂くる音
三輪山の三つの茅の輪くぐりけり
老若の幾千の手や阿波踊
秋蝶をつれ仏門に入りにつけり
山頂の池に集まる流れ星
水底は母のふところ鳩
透明に十一月の餅かな

槐安集

水野恒彦

首夏の坂岡井省二の歩き来る
夕雲のふちの金環更衣
風たちまち炎となりぬ罌粟畑
青あらし修司寺山修司の檄と思ふべし
五月闇数羽の鴉歩きぬる

延広禎一

花の雲大地に善財童子かな
黒潮を渡る鐘の音麦鶉
岬馬に恋の兆しや竜舌蘭
魂の字を背負ふTシャツ田草取る
丹田にわたつうみあり夏袴



加藤みき

たつぷりと緑をまとふ大朽木
足もとに茴香の花こぼれきし
若鮎のなかなかの面構へなり
藤棚やあまたの羽音恐ろしき
忍び足に浮巢離れてゆきにけり

石脇みはる

蝸蛄を追うて転びし童かな
塩田の跡形もなし半夏生
額の花近寄り難き翁かな
射干や黄檗山に師のお骨
梅檀の花一切を忘るなり

中島陽華

モンローウオーク羅着てゐたる
パリー祭はがねをけづる音ありき
熊笹の色あざやかに一茶の忌
最澄に似し母ポンポンダリアかな
木の葉木菟卒塔婆小町は耳遠し

竹内悦子

朧夜の森のひそひそ話かな
月下美人一つが咲いて月の色
ふらここの勝手に動く海の風
紅薔薇に見られてドイツ料理かな
どくだみの白き薔を掴みけり

栗栖恵通子

万緑や桂馬は金となりにける
夏銀河人魚の髪を束ねをり
もも色の欠伸出て来る水中花
旅枕ふたつ重なるほたるかな
山椒魚弥勒の夢を喰つてをる

大島翠木

夕薄暑森の深きに裸婦の像
長生きや蚊取線香灰の渦
薔薇は終はんぬカラマーゾフの兄弟
山法師良寛の字の流るるよ
蟬の穴三つほど黒澤羅生門

雨村敏子

機銃掃射の弾丸の跡朱夏
えごの花からだふわつと浮き上がり
水無月の鏡にうつるものの影
十葉の繁みに足を踏み入るる
匂袋もろうて帰る中の空

小形さとる

海照つて納戸の奥の聖五月
糸とんぼ癒ゆることのみ思ふべし
仏生会裏でモモコが喘いてゐる
たんまりと寝ての遊山や桜漬
啼くでなくわが枕頭の夏鯨

本多俊子

池の底草も花さく卯月かな
松平安神宮のの芯孝明天皇の匂ひかな
山の藤むらさき色にせめらるる
麦秋の道少年の走る音
夏萩や神官と巫女背伸して

天野きく江

一本の白き川ゆえ虹立てる
日の中の闇開け放ち雉子鳴く
波に影あり寄居虫の歩き出す
絮に包まれ薇の曼陀羅華
木霊呼ぶつもり泰山木の花

久津見風牛

神主に蹤いて高きに登りけり
山車動くすでに酒浴ぶ祭足袋
土を寄す畝にみみずも寄せてやり
面白く生きたし瓢箪なでてをり
ついてくる夏を切つたり自動ドア

近藤きくえ

気がつけば草の香まとひゐて夏野
藤房に暮れ方の風うごくなり
日かつと彩なす若葉波をうつ
口中に夏豆はじけ青くさし
ひと呼吸おきてもの言ふはたた神

近藤喜子

初夏やこころ大草原にあり
瞑想のかたち玉巻く芭蕉かな
河鹿鳴く地球もつとも青きとき
上げ潮の真ん中にをり夏蓬
もつともつと聴きたき声よ青葉木菟

谷村幸子

一つ葉の一つづつふえ群れてをり
松蝉や池の周りの砂あらし
赤れんがの街中ゆけり桐の花
冠島 杳島 みえて 卯浪かな
はらかならの揃ふ嬉しさ粽食ぶ

槐市集

醍醐季世女

何願うでもなく浮べ菖蒲の湯
水木咲く小雨の森の花明り
そよ風の代官山や竹の秋
えごの花母子像守りぬたりけり
母の日の銀座マロニエ通りかな

竹中一花

はにかみを覚えし少年初夏の風
浅緑瀬見の小川の祭かな
初夏やお初天神露天神
曾根崎を越え来し坂や花槐
十の目の槐見上げし卯月かな

谷岡尚美

泰山木の孤高にありし花の影
薄口の筍飯をにこにこと
雛尉は昭和一桁花吹雪
落椿残して帰る女寺
日盛りや神鶏のこゑいや高し

寺田すず江

亀の首交信中なり夏木賊
岩になりきつてゐる大山椒魚
ひこばえや銘刀の腋固めたる
はんなりと夕陽残れる鉄線花
エベレスト越えて来りし夏の蝶



槐集

高橋将夫選

人の眼の中に生きをり更衣
安城 近藤 公子

地球青し蟬つぎつきと生まれ出づ

水に生まれ水に生きをり雲の峰

青蜥蜴白日の闇欲しいまま

雲間より鳴りやまぬ鐘達谷忌

退院やブラックホールと赤いバラ
枚方 中野 京子

青嵐ギアチェンジのふたりかな

ここからの茅花流しのゆくへかな

余花の白パン屋のパンの匂ふ坂

皮を剥く新玉ねぎやルノワール

桜葉散り敷く土の湿りかな
近藤 紀子

落花の向かうジャングルジムの遺跡めく

ズッキーニの苗を植糸をり小町の忌

烏柄杓雨つぶひとつさげてをり

たかんなの皮広げおく小塩山

少年にファラオのほひ夏来る
枚方 富松 寛子

無重力を飛ぶブーメラン夏の月

昨夜荒る狐のぼたん咲きにけり

オリーブの花の奥なるそぞろ神

此の先も二人ゑんどう甘く煮て

山霊と蔵王権現若葉寒
谷岡 尚美

シャガールの宙飛ぶ二人白き薔薇

何事もなかつたやうに蟻地獄

どくだみの柴折戸あたり昼深し

蓬摘むふつと聴えし母の声

朴の花宙に歓喜を上げにけり
岡崎 岩月優美子

葎切の声に消さるるメランコリー

更衣きのふと同じ橋渡る

アフロディテ生るる泡かも卯浪立つ

芥子満開丘よりモネの下りて来し

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

人の眼の中に生きをり衣更 近藤 公子
暑くなってきたから衣更ということもあるが、皆が夏物を着
だしたから私もというのもある。人は多かれ少なかれ人目を意
識せずにはおれない存在。

退院やブラックホールと赤いバラ 中野 京子
ブラックホールは退院時の不安。バラは退院の喜び。俳句の象
徴性を限界まで活用した一句。

ズッキーニの苗を植ゑをり小町の忌 近藤 紀子
ズッキーニはペポカボチャの一種で、ヨーロッパ原産。美人の
小野小町との取り合わせが絶妙。

この先も二人ゑんどう甘く煮て 富松 寛子
仲睦まじいお二人。その上に、これでもかと豌豆の甘煮を加え
られると、いつまでもお幸せにとしか言いようがない。

何事もなかつたやうに蟻地獄 谷岡 尚美
何事もなかつたやうにとは、何かがあったこと。蟻地獄とはそ
んな場所だが、おおかたは平穩に時間が過ぎてゆく。

葭切の声に消さるるメランコリー 岩月優美子
メランコリーは憂鬱。憂鬱が葭切の声で消え去るわけだが、英

語と季語の葭切のミスマッチがおもしろい。

ほうたるに生れ因果の水を汲む 西村 純太
螢という日本的叙情の世界と因果という宗教的世界の融合した
世界に共振する。

黒南風やかたまつてをる亀の嵩 中田 禎子
かわいく、めでたい亀だが、かたまつているとなんとなく不思
議な雰囲気をかもし出す。白南風でなく黒南風で、異様ささえ
感じさせる。

神の樹のかい槐のまはり夏の蝶 竹中 一花
神の樹と崇められる槐の古木がある。そこに大きな夏蝶が舞っ
ている。こよなくめでたい景。

熱帯魚ひらりと嘘をかはしけり 加藤富美子
なるほど、あのきらびやかな世界を知っているような熱帯魚な
ら、それくらいのことばわけなく出来るだろう。同感。

乾坤の壺埋めてある木下闇 柳川 晋
木下闇から壺が出てくるとなると、一体どんな壺か興味しんし
ん。それが「乾坤」の壺というから、えらく大きな話になった。
まさに乾坤一擲の一句かもしれない。

潮騒や八十八夜の生たまご 大山 里
八十八夜に新茶でなくて生たまごときた。何で生たまごなのか
と、あたりが騒がしい。潮騒と思って聞き流すことにしよう。

(以下略)